

Wén zhì bīn bīn rán hòu jūn zǐ yě  
文質彬彬，然後君子也ぶんしつひんびん しか のちくんし  
文質彬彬として、然後君子なり〈雍也第六〉うえだ あつ お  
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

「巧言令色、鮮し仁」〈学而第一〉という言葉が示すように、言葉巧みにうわべを飾るだけで中身を伴わない、そういう人間を孔子は極端に嫌っていました。「巧言は徳を乱る」、巧い言葉は道德心を乱すものだ、とまで言っています。それとは逆に、少々荒削りで口下手であっても、真心のある人が大好きでした。「剛毅木訥、仁に近し」〈子路第十二〉が、そのことをはっきりと示しています。しかし指導者たる人物に対する客観的な評価基準となると、話はまた別です。

『論語』に「質勝文則野 (Zhì shèng wén, zé yě)」(質、文に勝れば則ち野なり)〈雍也第六〉という言葉があります。「質」とは本質、実質、いわゆる中身のことです。「文」とは文飾、文辞、いわゆる外見のことです。質が文に勝るということは、中身が充実していても、外見がそれに追いつかないということです。「野」は野卑、荒削り、野人ということです。野人はもともと孔子の好みでした。

しかし、これは背後に組織の指導者たる「君子」を想定した上での言葉です。つまり中身に外見が伴わなければ指導者とは言えない。いくら人間的に優れていても、ただそれだけでは君子にはなれない。出る所に出ればそれなりに格好を付けなければならない、というわけです。

しかし格好だけでも困る。これに続く言葉は「文勝質則史 (Wén shèng zhì, zé shǐ)」(文、質に勝れば則ち史なり)です。「史」とは何か、いろいろな解釈がありますが、この時代、文書係の役人のことを史官といっていました。これにはある程度の学問と教養が求められますが、組織を率いる指導者

ではありません。孔子はこういう人たちを形容して「史」と称したものと思われます。いくら言葉や文章が巧みでも、中身を伴わなければ単なる記録係のようなものだと言っているわけです。記録係が悪いというわけではありません。指導者としての条件を問うているだけのことです。

そして孔子は最後にこう付け加えます。「文質彬彬，然後君子也 (Wén zhì bīn bīn, rán hòu jūn zǐ yě)」(文質彬彬として、然後君子なり)。文と質が程よく調和して、始めて指導者と言える。「彬彬」とは、調和が取れて美しいさまです。

孔子の弟子で雄弁家の子貢は、このことを面白い言葉で比喻しています。「虎豹の鞞は、猶、犬羊の鞞のごとし」〈顔淵第十二〉。あの美しい高価な虎や豹の毛皮も、毛の部分を取り除いて、皮の部分だけを残せば、犬や羊の皮と同じようなものになってしまうのではないかと。鞞とは、毛の下に隠れた地皮のことです。毛を外面に例え、地皮の部分を中身に例えています。これは、何事も「質」こそが大事で、「文」はどうしてもよいのではないかと、と言った人に対して答えた言葉です。つまり、いくら素晴らしい中身であっても、外面が醜ければ意味をなさないということです。

今でも、暴言や失言を繰り返して問題になった後、真意はそうではなかった、言葉が足りず、誤解を与えてしまった、と言いわける「指導者」の姿を、テレビなどでしばしば目にします。仮にそれが誤解であったとしても、孔子や子貢だったら、このような「指導者」のことを何と評したでしょう。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)